

平成28年度企画展 2

うちの裂織り

めぐり

お

— 布の可能性を
追求する愉^{たの}しみ —

平成28年

10月1日(土) — 11月27日(日) 入館無料

開館時間：午前9時～午後4時

休館日：月曜日（10月10日体育の日は開館）・10月11日・11月4日・11月24日

後援：土毛新聞社、ラジオ高崎、J:COM 群馬

高崎市歴史民俗資料館 〒370-0027 群馬県高崎市上澁町 1058 Tel/Fax:027(352)1261 E-rekimin@city.takasaki.lg.jp
<http://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2013121900362/>

うちの裂織り

— 布の可能性を追求する愉しみ —



裂織り

どんなに古くなった布でも、たとえ小さな端切れでも、捨てずに生かそうと常に心がけて布を大切に扱っていた。擦り切れた布は継ぎ当てをし、布がくたびれてくると縫い目を解いて布にもどし、細く裂いて紐にした。経糸に丈夫な糸を張り、裂いた布を緯糸として織り込むと、再び布として蘇り、新たな用途に活用された。こうしてつくられた布を「裂織り」と呼ぶ。

「使い切る」文化

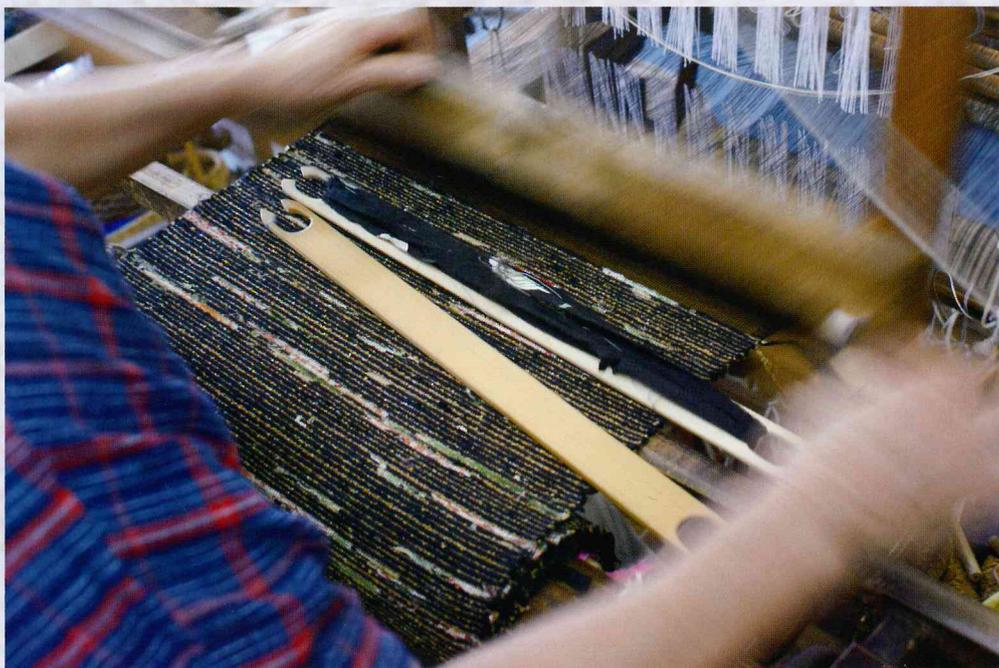
裂織りは使い古されると、再び組み紐にして利用した。最後は紐の端に火を付けて虫除けとして使い、燃えて灰になると土に返すという究極の「使い切り」の文化が裂織りである。布は最後の最後まで捨てられることなく、次々に新たな可能性を広げていった。

工夫する愉しみ

裂織りは、江戸時代から全国各地で織られていたが、裂いた布を緯糸とすることから分厚くなり、防寒に適していたことから、とくに北陸や東北の日本海側で盛んに織られていたという。裂織りの材料となるさまざまな素材の色とりどりの古布を合わせることによって、さらに自由な発想で工夫する愉しみが生まれる。近年、繊維産業の発達で布を再生する必要性はなくなったが、裂織りの独特な風合いが見直され、芸術性が評価されて、古布にとられない作品や作家も登場するようになった。

昔ながらの機織りの技を受け継ぐ歴史民俗資料館が未来に伝えたい「使い切る」という文化に触れるための展覧会です。







高崎市歴史民俗資料館

アクセス

- ① JR高崎駅西口(群馬中央バス) 県立女子大行き約30分「慈眼寺裏」下車徒歩3分
- ② JR高崎駅東口(群馬バス) 亀里JAビル行き約20分「下滝西」下車徒歩8分
- ③ JR高崎駅東口(ぐるりん) 群馬の森線「滝川郵便局入口」下車徒歩15分
- ④ 関越自動車道(高崎 IC)5分
- ⑤ 関越自動車道(高崎玉村スマート IC)3分
- ⑥ 北関東自動車道(前橋南 IC)5分

駐車場：大型車 3台／普通車 20台